

論壇

惠泉女学園
大学学長

木村 利人



南タイで「平和」模索
21世紀に入って、宗教間の対立と抗争は、世界の各地に広がりつつあり、それが政情不安の一要素ともなっている。国々も存在する。その一方で、対話と和解、そして融和のための具体的なプログラムも展開されてきている。

共生を意図して、1月下旬に南タイのプリンス・オブ・ソークラ大学(PSU)で開催された「アジア・ムスリム・アクション・ネットワーク(略称を「AMAN」というが、これにはアラビア語で「平和」の意味がある)の創立20周年記念式典と「多文化共生と世界平和」をテーマにした国際会議に招かれて参加した。

福祉、教育、感染症との取り組み、暴力、社会的不正や経済的格差・貧困・飢餓の問題など、宗教を超えたグローバル・アクションについての活動報告があった。たとえば南タイの五大学に連携して「学生平

た女性やその家族のためのラジオ番組を女性自身が取材、放送し、健康や生活についての宗教を超えたサポートや女性のエンパワーメントのプログラム等、多様なアジアにおける多文化・他宗教の共生の

による女性の解放」などの講義が行なわれている。

文化の多様性
まもるため

タイでは住民の90%以上が仏教徒であるが、この国際会

イスラムとの対話と共生

和クラブ」を設置し、時にマレーシアのイスラムの学生たちも交え、研修会で、イスラム、仏教、キリスト教等の宗教を超えた平和協力・紛争解決の方法と取り組んでいることや、紛争地域で被害にあっ

た女性やその家族のためのラジオ番組を女性自身が取材、放送し、健康や生活についての宗教を超えたサポートや女性のエンパワーメントのプログラム等、多様なアジアにおける多文化・他宗教の共生の

タイでは住民の90%以上が仏教徒であるが、この国際会

がかった。今回の滞在中も警戒が厳重で、銃で武装したタイ国軍による街角や幹線道路の要所にある関門が目についた。

今から45年前、筆者はタイSCM(キリスト教学生運動)の総主事の任にあり、チュロンコンン大学でも教鞭をとっていたが、当時バンコクのSCMのメンバー男女大学生たち約50人とのワークキャンプを主催し、この南タイの地でイスラムの青年たちと共に、竹を組み合わせて手作りの灌漑用小規模ダム建設のために汗を流して働き、語り合い、友情を深めた。

AMAN国際会議の最終日には「宣言」が採択されたが、その中で「地球上のあらゆる文化の多様性がまもられなければならないこと、そして、その多様性がこそが、相互に知り合い、尊敬し合い、祝福し合い、平和の内に共に生きるための根拠となること」を確信すると述べ、「南タイのあらゆるタイプの暴力の即時停止と平和的解決への交渉の開始」をタイ政府に対して訴えたことは注目される。

開会の祝辞でそのことを述べたら、何と45年前のその時のキャンパーの一人が、この会議に出席していたのであった。まさに主にある感激の再会であった。(きむらりひと)